

以森伝心

理事長 柏原康夫筆

第 12 号

2010年12月

特集：インタビュー「茶道具と森」

森に関わる人々 第2回

森林で働く人々②

森と木のなるほど講座 第8回

「生物多様性と森林」

チーム以森伝心ニュース モデルフォレスト運動レポート



京都の森を守り育てる運動に参加しませんか

茶道文化に寄り添い 竹の茶道具の伝統を守る

代々三千家(表千家、裏千家、武者小路千家)に出入りして茶の湯の道具を制作し、現在一般的には「千家十職」とよばれる家系の人々がいます。金物師、表具師、柄杓師、袋師、焼物師、茶碗師、塗師、釜師、一閑張細工師、指物師の十人の職家です。

黒田家はそのひとつで、約400年もの間、竹の茶道具を専門に、柄杓をはじめ花入れ、茶杓、茶器、香合などを作ってきました。

主材料の竹について、昔から日本人の生活になじみの深い素材としての竹と、その竹を取りまく環境について、十三代黒田正玄氏にお話をうかがいました。

黒 田家の初代が越前守に仕え、関ヶ原の合戦では西軍として戦った一武士だったのは今から約400年前のこと。

その後、剃髪して「正玄」を名乗り、大津・瓜生山に移り住む。その後、秀吉から「天下一」の称号をゆるされた一阿弥に師事して柄杓の製作を学ぶ。

やがて京に住むようになると、武家茶人だった小堀遠州と出会い、熱心に茶道の修業を積み、茶人との交流を深めていく。同時に柄杓作りの手腕を認められる。江戸幕府三代將軍徳川家光の柄杓師として推挙され、千家との関係が出来るのは三代正玄時代、表千家六代覚々斎の頃だという。それぞれの時代の創意工夫を加えながら、職家としての家業は明治以降も受け継がれてきた。

家業の職が柄杓師であることについて黒田氏はこう語ります。「これは私の想像ですが、初代はやはり武士でしたので、刀と同じ『シノギ』などの名称を持つ、柄杓を選んだのではないかと思っています。扱い方も刀に似ているんです。また、竹は昔から人々の生活の身近にあり、便利な素材だったのでしょう。初代の時代にも、それは例外ではなく、手近に竹があったということも柄杓を作り始めた理由のひとつだったのかもしれない」。

黒田家に代々伝わるのれん。石川丈山筆
「大津 茶ひしゃく屋 正玄」

現 代の日本で“竹”といえば、タケノコとして馴染みある孟宗竹が一般的だ。しかし、黒田氏が製作に使う竹は苦竹と呼ばれる種。「現在でこそ、苦竹の竹林はあまり見られなくなったが、孟宗竹が日本に入ってくる以前は、人々の生活に密着していたのは苦竹でした。苦竹のほうが一本一本に個性的な表情があり変化があります」。また、孟宗竹に比べ、柔らかすぎず硬すぎず、道具をつくるのに向いているという。竹の大敵の害虫もどちらかという入りにくい。産地としては、暖かい地方の竹は柔らかすぎるので、近畿地方のものがよいとされている。

竹を切るのに適した時季は、竹の水分が少なく虫が入りにくい10月中旬から11月。竹を切ってから、加工に着手するまでにはいくつもの下準備の工程がある。

「まず、切った竹は約2ヶ月間、逆さまにして置かせて置きます。竹は水分を上へ吸い上げる特性があるので、この特性を利用して水分を下ろすのです。十分に水分を抜いた後、今度は油抜きといって、炭でまんべんなく竹をあぶる





実際に使用している、竹を加工する道具。それぞれ、使いやすいように工夫されている。

作業をします。こうすると、余分な油が浮いてくるので、それを丁寧に拭き取っていきます。その後、2ヶ月ほど天日で干し、さらに納屋で4年間ほど自然乾燥させます。途中で虫にやられたりカビが生えたり割れたりしますが、そこで素材として使えるかどうか、淘汰されるんです」。

このように手間暇かけて厳選された素材を用いて、ようやく茶道具づくりにとりかかる。できあがった茶道具からは、竹の持つ品格を生かしつつ、使い手にとっての“用”と茶道具としての“美”を極限まで追い求める魂が伝わってくるようだ。

竹は昔、生活に非常に重宝する素材だった。きれいな竹は細工に使い、時には物干棹にしたり、竹垣やガードレールの代わりにしたり、家を建てる時は木と竹で土壁の土台を作るなど建築資材としても欠かせないものだった。

現在では生活の中で竹の使用頻度が少なくなり、人が竹林に入らなくなった。それが竹林が荒れる要因となっている。黒田氏も自ら竹をもとめて日本全国を見てまわるが、年々、良材を得るのは難しくなっていると嘆く。手入れの行き届いていない竹林は、光が地面に届かない暗い藪やぶになってしまう。必然的に地質が悪くなり、理想的な太い竹が育たない。

モデルフォレスト活動で、竹林の整備をしているグループも少なくないが、「竹林がこんなに暗いとは思わなかった。一步入ると、晴れている日でも相当暗くて驚いた」という参加者の声がよく聞かれる。

「本来であれば、定期的に切って使うことで、4～5年生の竹ばかり保たれるのが理想的です。しかし、多くの竹林は灌木が混在し枯竹が散乱して、日の光も届かない暗



竹一重切花入

上：竹香合
右：竹大棗



い藪になってしまっています。『苦竹の竹林は長者のひげと同じ』という言葉聞いたことがあります。“なるほど、うまいたとえだな”と思いました」。

豊かに蓄えられたそのひげは、人となりや貫禄を表す一方で、手入れも必要だし、日常生活に絶対に無くてはならないわけではない。苦竹は、食用にならないことから使い道が限られていて、需要が多いわけではない。苦竹の竹林を維持管理することは、意図的に手を入れていけないといけないので、“ゆとり”がないとできない、というたとえ話だ。

即物的な生き方や効率ばかりを追求する現代社会にあってこそ、こうした“ゆとり”が必要なのではないか。

私たちが竹の茶道具の背景にある竹林の環境に目を向けることは、“ゆとり”の大きさに気づききっかけになるかもしれない。

くろだしょうげん
千家十職 黒田正玄

1936年(昭和11年)、京都府生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。卒業後、京都へ戻り家業を継ぐ。1960年(昭和35年)から、三千家の家元へ出仕し、修行の日々を送る。1966年(昭和41年)、十三代黒田正玄襲名。京都府竹産業振興連合会会長。竹文化振興協会理事長。



もり 森林に関する人々

かつて、森林が元気だった頃、人々はさまざまなかたちで森林と関わっていました。食事の煮炊きに使う薪を集めたり山菜を採ったり、あるいは猟をしたりと、どの家庭も森林との関わりのなかで暮らしていました。そして現在。「森林の大切さを見直そう」「美しく豊かな森林を取り戻そう」という気運が高まってきましたが、人々はどのように森林と関わっているのでしょうか。当コーナーでは、森林に関わる人々について紹介します。

第2回 森林で働く人々②

前号では、「森林の仕事を行なう主体」として森林組合を中心とした体制について概観しました。

今号からは、実際に林業に携わったり森林を守る活動を展開している「人」「団体」に着目してまいります。

京都府林業士会の取り組み

今回紹介する団体は「京都府林業士会」です。京都府林業士会は、京都府知事に認定された指導林家(※1)もしくは青年林業士(※2)により結成された団体で、山林経営や育林の技術・見識を生かし、地域の中核となって森林・林業の振興、普及啓発に向けて様々な取り組みをされていますので、その一部をご紹介します。

1、「高齢級間伐(長伐期施業)コンクール」実施

一般的に人工林で伐採される林齢は40～50年ぐらいですが、手入れ不足のため荒廃する森林が増えています。こうした森林に手を入れ、森林の持つ多面的機能を維持しながら持続的な生産活動を行うことが大切になっています。

そこで林業士会では、この課題にアプローチすべく、平成21年に「高齢級間伐(長伐期施業)コンクール」をスタート。地



「高齢級間伐コンクール」第1回で京都府知事賞(最優秀賞)受賞の山林

域林業のモデルとなるような森林整備を行った会員と山主を表彰します。第1回のコンクールにおいて、京都府知事賞(最優秀賞)を受賞した山林では、整備に携わった会員の喜びもさることながら、山主のみなさんの反響が予想以上に大きく、「なお一層手入れに励みたい」という声も聞かれるなど、周辺の山主さんを含めた森林整備に対する意識の高まりが期待されています。

2、北桑田高校との交流会

京都府で唯一の林業専門学科である森林リサーチ科を設置している府立北桑田高等学校の生徒との交流会を、毎年秋頃に開催。森林リサーチ科の1年生から3年生の全員が参加し、現在の林業の課題や将来の展望について意見交換します。こうした機会を通じて、後継者として期待される生徒たちに、林業の現場での伝統技術や専門技術を伝えています。



3、モデルフォレスト活動と連携

森林や林業の重要性を府民や企業のみなさんに直接伝えていこうと、今年11月6日、コカ・コーラウエスト社によるモデルフォレスト活動「きょうとさわやか自然の森」森林保全活動(宇治田原町)に会員2名が指導者として参加。間伐や枝打ち等の技術指導を行ったところ、気持ちのこもった適切な指導や解説は、「実践的でわかりやすい」と大好評でした。指導者参加した2名の会員も、「今後もモデルフォレスト活動と連携していきたい」と手応えを感じていました。



森遊びイベントで、ツリークライミング® 体験を!!

ツリークライミング®は専用のロープや安全保護具を利用して木に登り、自然との一体感を味わう体験活動です。

ギブ・アンド・テイクの森林整備を考える研究会では、ツリークライミング®体験を取り入れた森林づくりを提唱しています。

お問い合わせ
TEL:0771-72-1339
E-mail:hiyoshi@forest-hiyoshi.jp
(府民の森ひよし内)
担当:片山、田端

森が好きだから、仕事として携わり続けたい

会長を務める伊東宏一さんは、間伐をする健全な緑の山づくりから、主伐、製材、建築までを一貫して行っています。

「林業の現状は、この半世紀の社会経済の変化によって大きく変化しました。林業で生計を立てようとすると『実際に木を売った金額に国の補助金をあわせて、ようやく採算がとれる』というのが現状です。林業を生業としていくにはなかなか厳しい時代ですが、だからといって採算だけを考えて『じゃあ辞めてしまおう』という時期はもう終わったと思っています。30年前、荒れた森を目の当たりにして、『このままでは森林の持つ様々な機能が損なわれるかもしれない』と危機感を覚えました。しかし、実際に森林に手を加えると、森が応えてくれるようによみがえったのです。その気持ちのよさに取り憑かれ、林業を続けています。ほんとうに森林が好きじゃないと、仕事で森林に関わっていけないと思います」。



伊東宏一(いとうひろかず)

京都府福知山市を中心に、林業から建築業までオールラウンドに行う林業界の頼もしい先導者。現在、京都丹州木材協同組合理事長、福知山地方林業研究会員などを務める。

森との関わりを生活の中で意識する

副会長の和田泰行さんは、北山磨丸太の育林と販売を行っています。

「私たちが府民のみなさんへの望みは、一つ目にたまにでもよいので子どもを森に連れて行って、その森林で培った感覚を持って大人になってもらうこと。二つ目に、国産材を積極的に使ってほしい。日本では人の暮らしの近くに森林があって、昔から手を入れて壊さないように使ってきました。だから、逆に人が関わり続けないと、環境はどんどん悪くなっていくばかり。間伐材や、大切に育てて主伐した木を積極的に利用してほしい。三つ目は、森林や環境に貢献している喜びを実感してほしい。それは国産材で作られた製品を使うとか、京都モデルフォレスト協会の森林整備活動に参加するなどいろいろあると思います。そういった意味でも、府民や企業が積極的に森に関わる機会を提供するモデルフォレスト活動は、とても意義のある運動だと思います」。



和田泰行(わだやすゆき)

京都の代表的な林業地「北山地域」で磨き丸太の育成・販売を手掛ける。現在、京都市森林組合理事、京都北山丸太生産協同組合理事などを務める。

林業をもう一度自立した産業に

副会長の藤本英一さんは、宇治田原町で森から木を切り出し、原木市場で木を売買する素材生産業を営んでいます。

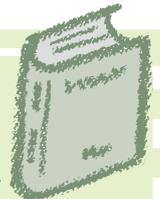
「よい森林というのは、一本一本の樹林が四方に均一に枝を伸ばし、空を見上げると木と木の間に空が透けて見え、地上に光が届き下草が育つ余裕がある明るい森林です。積極的に森林の手入れを行い、今ある資源を活用し、国からの補助金が無くても自立できる林業を取り戻すことが林業士会の目標です。その一環として、これから林業に携わる人たちに具体的な技術を指導し、青年林業士を育てることもしています。先日、宇治田原町で実施されたコココーラ社によるモデルフォレスト活動にアドバイザーとして参加させていただきましたが、今後も私たちがお役に立てることはどんどんしていきたいと考えています。府民の皆さんに森林に興味を持ってもらい、森林があることの大切さを知ってほしいと思います」。



藤本英一(ふじもとえいいち)

京都府南部の宇治田原町で素材生産業を営みながら、地域の林業を支える経験・知識豊富なリーダー。

森林用語辞典



※1 指導林家[しどうりんか]

「地域の模範と認められる林業経営を行っている」「林業後継者の育成指導に理解があり、積極的に指導活動ができる」ほかの要件に適應する人を都道府県知事が認定する。

地域の林業後継者・生産グループなどから要請があれば指導や助言を行い、行政とともに地域林業の振興に積極的に携わる。

※2 青年林業士[せいねんりんぎょうし]

「年齢がおおむね40歳以下で、地域の林業関係活動に積極的に参画し行動している」「地域において信頼され、将来地域林業振興の推進者となることが期待される」ほかの要件に適應する人を都道府県知事が認定する。新しい経営や技術などの調査研究を率先して行い、先進的な林業経営を実現を目指す。地域の林業関係に関連する活動に参画・助言をし、所属する組織のリーダーとして、青少年等に指導を行うなどの活動をしている。

須藤流手打ちそば 京都・綾部の美しい水と空気の下で結実した「須藤流手打ちそば」。

そば匠 鼓
TUDUMI

〒623-0115 京都府綾部市瀬垣町林ノ下23-2 店舗営業時間 11:30~14:00
TEL: 0773-40-1168 HP: <http://www.sobasyou-tudumi.com/>

●アクセス
「瀬垣」の交差点から舞鶴方面100メートルほど、山側(JR線と反対側)に立つ「瀬垣丹和ゴルフ練習場の看板が目印。鋭角に進入する山道(上り坂)を進んでいくと、ゴルフ練習場を過ぎたあたりにある数寄屋風店舗です。」

森と木の ナルホド講座

監修：京都モデルフォレスト協会

2010年10月、愛知県名古屋市で
生物多様性条約を結んだ国が集まる会議
「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」
が開催されました。
「生物多様性」とは、あらゆる生物種の多さと、
それらによって成り立っている生態系の豊かさや
バランスが保たれている状態のことで、
今回の会議では森林の果たす役割も
大いに注目されました。

第8回：生物多様性と森林

生物多様性とは

「生物多様性の保全」とはどのようなことでしょうか。

自然環境はすべての生物の「すみか」であり、それが壊されてしまうと生物は生きていけません。

前号でもお伝えした通り、日本は木材の消費量の約8割を外国産材に頼り多くの森林を伐採する一方、国内では人と森林の関わりが希薄になって森林が荒れてしまう事態が起こっています。人間が自然環境に大きく手を加えたり、逆に長年関わってきた環境との関係を絶つと、その自然環境はバランスを崩してしまい、その環境に関わりのあった生物間のバランスも崩れ、連鎖的に絶滅してしまうことがあるのです。

その繋がりが単純な構造であるほど、絶滅につながりかねません。しかし、生物が多様につながりあっていれば、仮に何らかの理由で一つの種が存続できなくなっても、補完しあって、新しい関係を築き上げる可能性があります。そういった意味でも、「生物多様性」を保全し、ゆるぎのない自然環境を目指す意義は大きいのです。

自分たちの生活には直接に関係がないと思っ
ても、すべての生き物は大きなり小なりお互いに影響を与えあっている
ので、思わぬところで影響が出てくることもあるのです。

国際レベルで考える森林

生物多様性条約締約国会議は、生物多様性の保全という共通の目的を持って、熱帯林破壊や絶滅危惧種等の課題に取り組み、その恵みを将来にわたって利用するための話し合いを続けてきました。途上国と先進国の対立があるなど会議は難航しましたが、最終的には遺伝資源の利益配分ルールを定めた新たな国際協定「名古屋議定書」と、2010年以降の多様性保全に係る世界目標「愛知ターゲット」という二つの主要議題を採択して閉会しました。

「愛知ターゲット」が採択されたことで生物多様性の保全に向けての基本的な体制がようやく整ったといえるでしょう。

会期に合わせて関連の会議も多く開催され、地球温暖化対策に役立つ新しい仕組みを協議する閣僚級会合では、森林を守ることは地球温室化対策にも生物多様性保全にも役立つという考えのもとで話し合われました。

また、国際機関や国際NGOが参加するサイドイベントでも、森林と生物多様性の関わり的重要性を訴える声が多く聞かれ、それぞれの立場からの「森林保全と生物多様性」を訴え、パートナーシップを結んだり、意見交換が行われました。

このように「生物多様性の保全」というテーマのもと、生物たちを育み育てる森林の大切さが強調されることとなった国際会議だったといえるでしょう。

私たちは「生物多様性」から、どんな恩恵（生態系サービス）を受けているでしょうか。

具体的には次の4つ機能があります。

維持的サービス

生態系サービスの内すべての基盤となるもので、水や栄養の循環、土壌の形成・保持など、人間を含むすべての生物種が存在するための環境を形成し、維持する。

調節的サービス

汚染や気候変動、害虫の急激な発生などの変化を緩和し、災害の被害を小さくするなど、人間社会に対する影響を緩和する効果を指している。

供給的サービス

食料や繊維、木材、医薬品など、私たち人間が衣食住のために生態系から得ている様々な恵みを指す。

※今回の会議で議題にあがっていた「遺伝資源の利用から生ずる利益の公正で衡平な配分」というのは、この供給的サービスから生み出される利益の配分のこと。

文化的サービス

生態系がもたらす、文化や精神の面での生活の豊かさを指す。レクリエーションの機会の提供、美的な楽しみや精神的な充足を与える。

チーム以森伝心ニュース

「チーム以森伝心」メンバーが、モデルフォレスト協会の活動取材し、レポートします！

同志社大学で協会のモデルフォレスト運動が紹介されました！

取材日時：10月12日（火）

場所：同志社大学新町キャンパス

同志社大学政策学部の学生が受講する「地域力再生実践特別講義」で、「地域力再生」の現場に携わる京都府職員が講師となり、「府民参加の森づくり」を進める協会の取組みが紹介されました。



講師は、「日本の森林は国民共通の貴重な財産である」と強調。特に京都府の森林面積は75%であり、その大半は民有林が占めている現状を示し、モデルフォレスト運動の意義を講義しました。

残念ながら質疑応答の時間はありませんでしたが、配布されたコメントカードの裏面までびっしりと感想を書いている学生が何名もいたのは印象的でした。学生世代がもっと協会に関わるようになれば、協会の活動はより一層活発なものとなっていくことでしょう。



（前田 拓）

「母国の山について何も知りません」では寂しくないですか？

取材日時：11月6日（土）

場所：南丹市美山町宮脇



シイタケ原木を運んで並べました

南丹市美山町にて、みんなで進めよう“つながりの森づくり”が行われました。参加者は佛教大学の学生です。シイタケ原木を組んで並べ、その後間伐を行いました。間伐では1本の木を倒すのも一苦労。でも見事に倒

れたときには「楽しい！」「きもちいい！」とうれしそうな声が聞こえてきました。

参加者のひとり、ベトナムからの留学生に、母国の山や森にはどんな木が植わっているの？と聞いてみると、山に行くこともなく母国の森林について全く知らないとのこと。むしろ日本人の私が教える事になってしまいました。外国に行ったとき「母国の山について何も知りません」ではちょっと寂しいですね。参加した学生が森林活動を学びの場として、日本の森の事をちゃんと伝えられる学生になって欲しいと思いました。

（石川 求）

男子の世界(?)に“女子力”でカツ！「林業女子会」の誕生です

取材日時：11月14日（日）

場所：府民の森ひよし

「林業女子会@京都」という耳慣れない名前の会が旗揚げされ、協会初の女子だけの山仕事体験学習が22名の参加を集め、府民の森ひよしで行われました。

午前中は木工館で座学、森林に関する基礎的な解説を府の女子職員が行い、昼食に鹿肉を使ったジビエ料理を楽しんだ後、午後からはフィールドに出て間伐作業などの山仕事を実体験、皆さん充実した一日を終了しました。

「木の伐採は森林破壊だと思っていたので、森林を

育てるためには木を切ることが必要なんだということを学べて、とても新鮮でした」との感想も聞かれ、ノコギリを使うのも初めてという女性から専門職を目指す学生まで多彩な人材の今後の活躍が期待されます。

（森 稔）



熱心に学んだ後、山仕事に挑戦するメンバー

活動報告

森づくり体験活動を実施

11月23日、「森づくり体験教室」を三井物産社有林(京都市右京区)で行いました。当地は、協定に基づき鞍馬火祭り保存会や大文字保存会等と連携して伝統行事に必要な薪や松明の材料の確保・育成のための取組を進めている場所です。当日は、ヒノキやアカマツと広葉樹の混交林内で、会員や府民約30名が、日当たりをよくしてアカマツやミツバツツジの生育を促すための伐採作業を約3時間実施。伐採した樹木は、薪などに利用される予定です。



ボランティアリーダー養成講座を開講

企業及び森林ボランティア団体のリーダーを養成するための会員向けの講座を開講しました。9月～12月にかけて5回の講義では、受講者の森林整備活動がより一層充実したものになるよう、ボランティア活動の実践者などからの講義や里山林の整備体験、安全対策などを習得する幅広いカリキュラムが組まれました。スキルアップした受講者が、今後のそれぞれの活動を一層充実したものにするのが期待できます。



企業等の森林づくり交流会を開催



9月14日、近畿中国森林管理局、滋賀県、京都府との共催で、「企業等の森林づくり交流会」を開催しました。京都府内や滋賀県内で森林づくり活動を実

施したり実施を検討している約30の企業や団体の担当者60名が参加。キリンビールや村田製作所の事例報告のほか、小グループに分かれて活動状況や課題などの情報交換を行うなど、今後の活動の充実と参加者の拡大に向け活発なやりとりが繰り返されました。

<竹の環プロジェクト>実施

10月16日、京都大学桂キャンパス内の竹林で7回目となる「竹の環プロジェクト」が実施されました。小学生から高齢者まで約200名の府民等が参加し、竹の伐採に挑戦。連続して参加されている方も多く、各班が10本の竹を伐採するというノルマを達成して終了しました。



秋の片波源流域自然観察ツアー

10月17日、府の自然環境保全地域にも指定されている片波川源流域一帯を、自然観察インストラクターの解説を聞きながら巡るツアーを実施。秋空の下、親子連れも含めて38人の参加があり、参加者は伏状台杉群の存在感には圧倒されていました。



発行：公益社団法人 京都モデルフォレスト協会

入会案内資料をご希望の方は、ご連絡ください。

〒602-8054 京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2 府庁西別館内

TEL & FAX 075-414-1270 E-mail kyomori@kyoto-modelforest.jp

URL <http://www.kyoto-modelforest.jp>

2010年12月発行

企画・編集：自然堂(じねんどう)株式会社



この印刷物は間伐材印刷用紙に大豆油インキで印刷しました。